

こもら
女性編集室

こもら ち女 Women's CHOICE



聴講した谷本亮さん(右)＝10月、浜松市中区のあいホール

子育てパパ もっと輝く社会へ

イクメンのプロ、浜松で講演

「イクメン」が新語流行語大賞トップテンに選出されて来年で10年。抱っこひもで赤ちゃんを伴う父親の姿は見られるようになったが、子育てにおける存在感はまだ薄い。父親がわが子や母親のために、子育てで支援関係者が父親のために、それぞれ取り組むべきことは何か。大阪教育大准教授でNPO法人ファザーリングジャパン顧問、小崎恭弘さん(51)の講演を浜松市内で聴いた。(加藤愛己)

「言葉の爆発期の3歳児はドリーマー。『なんでなんで』は『ハハ、一緒に遊んで』と翻訳して」「ハハ、2歳児の服サイズは、Sじゃないよ。子どものこと、もっと知ろう」
男の子3人を育て、保育士経験もある小崎さんは、子育てを楽しむ父親を増やそうと全国で講演している。10年前に比べ、「ハハたちは頑張ってる」と子育てに関わる父親の増加を喜ぶ。これを「功」とすれば、「罪」は、本当に子育てで苦手とする父親が「悪いハハ」と見なされること、子育てをしない父親を持った母親が抱く「外れ感のすごさ」という。子育ては親離れ子離れが最終目標だが、小崎さんは社会の変化に伴い

「30歳まで続く」と長期化を指摘。子どもが誕生した時点で夫婦共同プロジェクトとして作戦を立て、実行するよう勧める。夫婦は幸せになるために結婚し、子を望んだはず。静岡県「子育てに優しい企業」アドバイザー瀧美由喜氏＝東レ経営研究所＝の「女性の愛情曲線」によると、この時期の子育てが母親の父親に対する愛情を左右するという。父親が子育てに関わると、子どもは認知発達に優れる▽社会に適応する▽情緒的に安定する▽非行に走りにくいなどの結果につながると近年の研究で明らかになっている。鍵を握るのは、子どもへの接し方における「レパートリーの多様性」だ。

例えば第1次反抗期の2歳児。自我を受け止めつつ、してはいけないことをした時は夫婦一緒に「壁」となった上で片方は「今日だけで」と通してあげる。遊びについても、母親が小さく優しく、丁寧にわが家で遊ぶ一方、父親は大きく元気に、ダイナミックに乱暴に外で、と対角をいく。多様なレパートリーで育

単に家事育児をするのでは不十分だ。母親が父親に最も求めているのは「私(母親)」への気遣い。気持ちをくんだ上での家事育児が肝要となる。さらに、かわいさや楽しさ以上に、「しんどさ」に共感することが大切だという。子育てのリスクは子どものけがや病氣。逃げる父親と、逃げる父親を



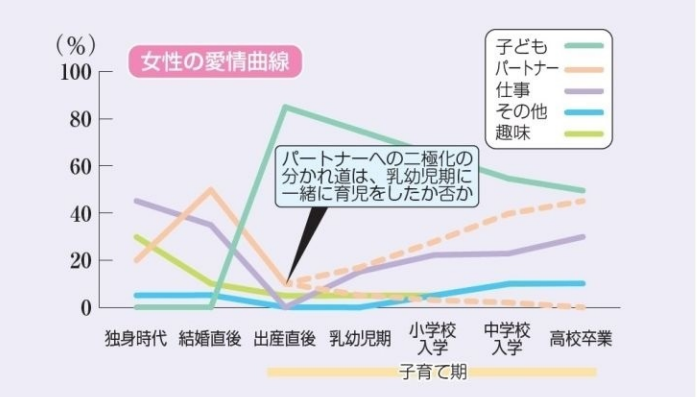
パパの子育てについて講演する小崎恭弘さん

親の役割
「レパートリー」意識
聴講者、多様な気付き

妻(31)と1歳の長女と一緒に聴講した会社員谷本亮さん(31)＝浜松市中区＝は「夫婦でさまざまなレパートリーを持って子育てすると、子どもは多様性を学び、新しい文化や環境に触れても『いろいろな人がいる』と動じなくなると分かった」と感想を述べた。1歳の長男を育てる高校教諭鈴木直さん(28)＝同＝は「風呂や散歩など目の前の子育ては積極的にしているが、5年後、10年後は意識していなかった。妻しか分からないしんどさを先生に代弁

してもらって理解できたこともある」と語る。育児休業中の大学職員佐々木哲也さん(35)＝同市東区＝は「男性の育児は相談相手が少なく、先生の実体験を踏まえた話が参考になった」と話した。

育児は夫婦のプロジェクト「しんどさ」共感が大事



女性の愛情、ライフステージで変化

「女性の愛情曲線」は、女性たちの愛情の配分がライフステージでどう変わるかを調べている。結婚直後は「夫」が1位だが、子どもが生まれると「子ども」が1位となり、「夫」は下がる。その後、徐々に回復するグループと低迷するグループに二極化する。出産直後から乳幼児期に「夫と2人で子育てした」と回答した女性たちの夫への愛情は回復、「私1人で子育てした」と回答した女性たちの愛情は低迷するという。

ですと子どもは豊かに活動でき、道徳心も育まれる。小崎さんは「パパは1週間に1日がつり遊んでほしい。難しい場合はせめて2週間に1日、年間24日遊んで」と勧めた。子育てに関わる父親は増えたが、



抱っこひもで赤ちゃんを抱え、一緒に聴講する父親

見て諦める母親は「双方まずい」。まずは母親が父親を逃さない。母親のしんどさに気付いた人ではか、変わることはできないからだ。共働きの場合、仕事を休んで看病する母親に父親が昼休みに電話した時、関心事が自分のことでは、夫婦関係の維持は危うい。「第一声が『俺の夕飯ど

うなる?』では、ママは『別れよう』と思うよ。気持ちの理解、家事育児、共感。そして一番上に家族の一体感がある。そうすれば、この家族で良かった、これからも一緒に生きていこうと思える」と小崎さんは強調した。講演は浜松の未来を育てる会(浜松市、大隅和子代表)が主催した。

男性の本来の力 生かすには…

自治体や子育て支援関係者による今後の「父親支援」の方向性はどうすべきか。小崎さんは子育てで父親が目される理由に、少子高齢化に伴う人口減や、母親の育児不安とそれに続く児童虐待などを挙げる。特に虐待はどの家庭でも起きる可能性があり、父親が「子育ては母親の仕事」と言い逃げるのは許されない社会になった、と指摘した。父親の多くは会社のエースとして長時間労働を担い、家事育児ができない。結果、母親に負担が偏り、母親も子どもも父親自身も追い詰められる。小崎さんは「解決には父親が子育てするのがいい」と強調する。日本には古来から、子育てする男性を指す言葉に「父」がある。「父親支援」とは、男性が本来の力を発揮できるようにすると同時に母親支援を包括するよう助言する。具体的には①子育ての方法や知識を伝える②夫婦関係の在り方を考えてもらう③ワークライフバランス(仕事と生活の調和)を意識してもらう④地域ネットワークをつくる一を支援の主眼に置く。父親支援は、父親の参加が少ないなど課題を抱えるが、「父親が子育てから排除されてきた歴史でもある」と小崎さん。「車の運転に例えるなら、支援者は代わりに運転するのではなく案内をしてほしい。『助けて』という声を聞き逃さないで」と訴えた。

自治体などの支援不可欠

と強調する。日本には古来から、子育てする男性を指す言葉に「父」がある。「父親支援」とは、男性が本来の力を発揮できるようにすると同時に母親支援を包括するよう助言する。具体的には①子育ての方法や知識を伝える②夫婦関係の在り方を考えてもらう③ワークライフバランス(仕事と生活の調和)を意識してもらう④地域ネットワークをつくる一を支援の主眼に置く。父親支援は、父親の参加が少ないなど課題を抱えるが、「父親が子育てから排除されてきた歴史でもある」と小崎さん。「車の運転に例えるなら、支援者は代わりに運転するのではなく案内をしてほしい。『助けて』という声を聞き逃さないで」と訴えた。